

佐賀市 23 歴史探訪

「龍護寺跡」の長尾家墓所

佐賀大学医学部と鍋島中学校とのほぼ中間にある「鍋島区画記念公園」南西部に隣接する「長尾家墓所」の由来をご紹介します。

同記念公園は、今から約18年前に整備されたものですが、鍋島土地区画整理事業の際、「龍護寺の墓所」も整理事業地区内に所在していました。

当時、龍護寺はすでに廃寺となっており、荒れた墓地だけが残っていました。区画整理事業実施に先立ち、調査を実施した結果、佐賀藩の儒学者であり殖産興業にも尽力した長尾矢治馬（東郭）一族の墓所であることがわかりました。

長尾矢治馬は、安永7（1778）年、干拓による新田開発を藩に献策しました。その内容は「藩財政が窮乏しており、その解決策として与賀・川副・嘉瀬・白石方面の埋め立てをしたい。10年で6千町の新田を開き、約3万石の増収が見込まれる。経費は万人講（現在の宝くじのようなもの）の利益を充てる。」というものでした。矢治馬の献策は認められ、「搦方附役（＝干拓担当者）」を命じられました。

この干拓による新田開発で、佐賀藩の収益は増加し、財政立て直しの基幹のひとつとなりました。

長尾一族の墓所は、同公園南西部の隣接した所に移設・整備され、説明板も設置されています。周辺においての際は、ぜひ、お訪ねください。

一口メモ

・矢治馬の養子、長尾道助（文恭）は、天明元（1781）年、佐賀藩校弘道館が創建されると、古賀精里や石井鶴山などとともに儒学を教えました。

・江戸時代初期、佐賀藩は幕府より36万石の領地を承認されました。そのときの石高を「表高」といい、江戸時代を通じて変化することなく、大名家の「格式」を表すものになりました。これに対して、実際の石高を「実高」といいます。佐賀藩は盛んに干拓が行われたので、実際の石高は90万石とも100万石ともいわれています。



▲昭和61年12月ごろの龍護寺墓地



▲鍋島二丁目に移設された墓地(外)



▲鍋島二丁目に移設された墓地(内)

